

「保育実践演習」における学生の実践力養成について

— 出前保育を通して —

栗原ひとみ^[1] 植草学園大学発達教育学部

筆者は「保育実践演習」という科目で出前保育を実践した。ここでいう出前保育とは幼稚園・保育園の一定時間の保育を請け負い、指導案を作成し、パフォーマンスをすることで保育活動の一端を担い、園の保育目標に寄与する活動を提供することである。出前保育を行う効果は次の3点が挙げられる。①学内と学外の相互循環で学ぶことができる。②チーム活動の意義を学ぶことができる。③臨場感の中で、子どもから、保育者から、学友からの3者から学ぶことができる。出前保育の特長には次の4点が挙げられる。①ゴールが明確である。②フィードバックが動機づけに繋がる。③チームで保育することを経験する。④集団による協働性が培われる。今後の課題としては3点が挙げられる。①園の保育目標のパフォーマンスへの反映。②パフォーマンスの独創性。③援助の方向性である。保育者養成段階において、学生集団で、子ども集団を保育する経験を用意し、学生に実践力を携えたい。

キーワード：保育実践演習，出前保育，実践力養成

1. はじめに

1.1 「保育実践演習」創設の背景

平成22年度保育士養成カリキュラム改正時に新設科目として「保育実践演習」科目は設けられた¹⁾。科目趣旨について「(略) 自らの学びを振り返り、保育士としての必要な知識・技能を修得したことを確認する」と記されている。この科目は終年限に開講される、いわば出口での「学びの集大成」として位置づけられている。この科目を創設して、なぜこのように出口で「学びの集大成」が確認されなければならなかったのか。そこには保育士としての最小限必要な資質能力の全体については明示的に確認されてこなかった等、養成段階に対する批判・反省があった。保育現場からも養成機関に対して専門職にふさわしい一定・均一な実践力を携えた人材を送り出してほしいという世論が高まり、それらの課題を克服するために提案されたのがこの科目である。この科目を履修することで「学びの集大成」が確認さ

れることが適当であるとされたのである²⁾。

1.2 「保育実践演習」科目趣旨

この科目のねらいとしては1. 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項 2. 社会性や対人関係能力に関する事項 3. 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項 4. 教科・保育内容等の指導力に関する事項を踏まえることが明記されている。それぞれのねらいについて到達目標と目標到達の確認指標例が示されている³⁾。

授業内容例としてロールプレイ・事例研究・実務実習・フィールドワーク等が挙げられている。しかし厚生労働省より科目のガイドラインや授業のねらい・形態は示していても、具体的な内容は示されていない。そのため実際の授業展開については保育士指定養成校に任せられ、試行錯誤しているのが現状である。科目新設から数年を経て、現在ようやく各々の授業実践例が報告されてきているところである⁴⁾。

[1] 著者連絡先：栗原ひとみ

1.3 実践力とは

「今後の教員養成・免許制度の在り方について」においても、「確かな実践力と人間関係力を備えた人材」の養成が危急の課題とされ、実践力育成がこれまで以上に求められている⁵⁾。では実践力とはどのように考えられているのか。

小原(2013)⁶⁾は保育実践力を「乳幼児の生活や遊び場面において、一人ひとりの子どもの様子や刻々と変化する状況を多面的に捉え、子ども達が『いま・ここで、あたらしく』ふるまえる状況を即応的に展開する力」としている。さらに保育実践力を構成する核として大きくは2つをあげ、その1つは「知識・技術」で、もう1つは「保育に向かう姿勢」とした。そうしたうえで、保育実践力を、形式化した決まった答えを導き出す力ではなく、刻々と変化する状況や子ども一人ひとりに「いま・ここで」求められている事柄を選択し判断する力、蓄積された知識や技術を結びつけて実践する力、としている。

1.4 出前保育とは

最初に出前保育という概念を出したのは日本の保育界の父と言われている倉橋惣三ではないだろうか。倉橋の著作である幼稚園真諦⁷⁾から引用すると、「私は時々こんなことを考えます。幼稚園へ子どもを来させるのではなく、こちらから子どもの遊んでいるところへ出向いていくことにしたら、どんなものだろうか。つまり出かけ保育です」。倉橋は、「子どもたちが自然のままに遊んでいる中に、いつのまにか、するすると教育に入らせるようにする工夫はないのでしょうか」と問うている。倉橋がこのような出前保育の概念を提示してから約80年を経とうとしている。

出前保育とは現在、目的に応じて2つに大きく分けられる。1つには保護者支援を目的として保育士等保育者が保育所以外の場所に出向いて親子に遊びの機会を提供することである。もう1つは子どもを対象にして保育所・幼稚園等現場に出向いて遊びを提供することである。どちらも「出前保育」⁸⁾等と言われている。本論で扱う「出前保育」とは子どもを対象に園に出向いて行う、上記文章の后者に該当する。

1.5 出前保育の意義

保育現場で出前保育を行うことの意義を筆者は以下のように整理する。

1 集団で集団を保育する体験となる。

学生集団が、子ども集団を保育するという体験は実習では体験することができない。多くの場合、実習園への配属は1人ないし2人である。実習生が実習中に現場保育者集団の一員となっているのにもかかわらず、実習という側面では個人的な体験となる為、保育者集団で子ども集団を保育している実感はもちづらい。学生が個人的な体験の範疇で実習を修めている限りでは、チーム保育で現場が成り立っている実態が見えづらいと考える。しかしこの保育者集団で子ども集団を保育するチーム保育の経験こそが、保育者になると同時に即日のうちに求められてくる。出前保育での体験からチーム保育の一員である自覚を促すことは重要な経験になると考える。

2 保育の主導権が学生集団にある。

どのような保育を企画・立案するのは、学生集団が主導権を握っている。実習では部分・精錬実習ではイニシアティブを取ることが設定されているが、実習以外では、この経験は改めて用意しない限りは見当たらない。

3 園の保育理念を実現する為の保育方法を集団で学ぶことができる。

学生集団で園の保育理念を学ぶとは、学生の数だけの理解の在りようと段階が存在する。多様な理解・段階を、準備の過程でディスカッションすることで、交換し合い、深め合い学び合うことが可能になる。

4 学生同士の学び合いの機会になる。

実習では指導者から学ぶことは多い。しかし指導者は保育専門職として圧倒的な存在である。時には「まだまだ到底あのような援助は自分にはできない」と学生が比較して、力不足を意識してしまうこともある。しかし、出前保育は学友であり、互いに同じ養成段階にいる同志である。初めて会う子ども集団を眼前にして、同じ条件で同じ状況で、学友がどのように振る舞うか、は身近な同志だからこそ刺激的に学び合える効果がある。

これらの意義に鑑みて、出前保育で実践力を養成し、この科目のねらいを達成できるのではないかと考えた。

1.6 保育実践演習と出前保育

筆者はこの科目のねらいに合致した方法として、出前保育という形で学生たちが実際に保育園・幼稚園に出向きパフォーマンスをすることを課した授業を行った。

パフォーマンスとは、ここでは学生が劇やダンスなどを含めた保育の身体表現を意味する。(以下、パフォーマンスと記す)。

筆者は出前保育を次のように考えている。出前保育とは、幼稚園・保育園の一定時間の保育を請け負い、指導案を作成し、実際にパフォーマンスをすることで保育活動の一端を担い、園の保育目標に寄与する活動を提供することである。出前保育という形態は1.2で前述した「保育実践演習」の授業例の実務実習に相当すると考えた。

2. 目的と方法

2.1 目的

保育実践演習において実際に学生が保育園・幼稚園に出向いて出前保育を行うことが実践力養成に、どのような効果と課題があるのかを明確にする。

2.2 実施方法

実施期間 2014年5月～9月

実施時間 各園約1時間程度

実施園 保育園3箇所 幼稚園2箇所
1園につき2回の実践をした園もあり。

実践回数 計6回(3チーム2回ずつ)

交通手段 基本、自転車

もしくは車2台(荷物搬入用・悪天用)

実施方法 授業担当者(栗原、以下授業担当者として記す)が履修者4年生21名を3チームに編成した。グループ編成のメンバー構成は学生に任せた。1チーム(7名)2箇所の保育園に出前保育を実践することを課した。移動手段は基本的に自転車にした。車で行かざるを得ない場合も園の駐車場をお借りする関係で2台(荷物搬入専用)止まりにした。

2.3 研究方法

授業担当者はリーダーと連絡を取ることで、チームの進捗状況を把握し、適宜指導を行った。学生は授業外の練習時間としてはおおよそ十数時間を要し、かなりの学修時間が上乘せされた。学内リハーサルは必ず行い時間計測し、最終的な確認をした。

授業担当者は学生が園との打ち合わせから始まり、出前保育を完了し、振り返りシートを提出するところまでを観察することとした。観察のポイントを以下のように定めた。

I 参与観察

- 1 保育園・幼稚園への事前訪問
- 2 集団保育の内容作りと練習
- 3 当日の実施

II 学生の振り返りシート

2.3.1 保育園・幼稚園への事前訪問

授業担当者は園への出前保育の依頼を取り付けるまでを引き受け、後は学生が園に事前訪問の電話をかけるところから任せた。学生の事前訪問時の打ち合わせ内容を以下に列記する。①園の保育目標の理解、②園の保育方法の理解、③園の保育内容の理解、④この時期の子どもの保育の実態、⑤この時期の子どもの興味の実態、⑥実践日時の確認、⑦園の場面の確認(例:お誕生会、お楽しみ会等)、⑧場所の確認(音響・子どもの出入り・学生登場の仕方・椅子の配置等)、⑨参加園児数と年齢の確認、⑩園児の前後の活動の確認(1日の流れ)、⑪おおよその出前保育内容の確認(劇・リズムダンス等、後日指導案を提出しご指導のお願い)、⑫大道具搬入の為の駐車場の使用許可・場所・時間・台数の確認、⑬使用する小道具の確認、⑭参加学生人数の確認、⑮園児へのお土産の許可、⑯当日集合時間・場所・交通手段、⑰園からお借りする物(暗幕・舞台用机・ホワイトボード・ピアノ等)、⑱学生が持参する物(上履き・水筒等)。これらについて学生が園と滞りなく打ち合わせできたか観察した。

2.3.2 出前保育の内容作りと練習

学生集団が集団保育を企画・立案するにあたっては、まず役割分業をするように指導した。その役割を以下に列記する。①園との打ち合わせ担当者

(リーダー), ②学生間連絡係 (サブリーダー), ③脚本係, ④衣装係, ⑤スケジュール管理係, ⑥大道具係, ⑦小道具係, ⑧備品購入係, ⑨会計係, ⑩音響係, ⑪プレゼント製作係。なお, 係は実践するたびに交代するように指導した。

保育内容を立案するにあたっては, その要点を指導した。以下に列記する。①園の保育方針に沿っているか。②この時期の子どもの興味を捉えたものになっているか。③実習園で実践しようとする内容か。④活動のねらいは適切か。⑤活動の時間と流れは適切か。⑥動的・静的活動のバランスは適切か。学生はこれらを考慮して指導案を作成した。

2.3.3 当日の実施

26年度の実践を表1に記す。

表1 実践一覧表

学生チーム	日にち	実習園	主な内容
Aチーム	6月2日	D幼稚園	劇・ダンス
	6月23日	E保育園	劇・ダンス
Bチーム	7月9日	F保育園	劇・ダンス
	7月29日	J幼稚園	劇・ダンス
Cチーム	6月18日	J幼稚園	劇・ダンス
	7月15日	H保育園	劇・ダンス

2.3.4 学生の振り返りシート

園での実践直後に学生には振り返りシートの記入を求めた。シートには①自分の係活動について, ②準備, ③実践, ④自己課題の発見, ⑤課題克服の取り組み, について記述してもらった。この科目の4つのねらい事項に応じて記述するように学生には指導した。以下に筆者が出前保育で実現可能な確認指標例を列記する。

1. 使命感や責任感, 教育的愛情等に関する事項
○誠実, 公平かつ責任感を持って子どもに接し, 子どもから学び, 共に成長しようとする意識を持って, 指導に当たることができたか。
2. 社会性や対人関係能力に関する事項
○挨拶や服装, 言葉遣い, 教職員への対応など, 社会人としての基本が身についていたか。
3. 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項

○気軽に子どもと顔を合わせたり, 親しみを持った態度で接することができるか。

4. 教科・保育内容等の指導力に関する事項

○自ら主体的に教材研究を行うと共に, それを活かした学習指導案を作成することができたか。

3. 実践結果

3.1 実践の概要

1 保育園・幼稚園への事前訪問

学生は授業担当者が了承を得た園1箇所につき2回の事前訪問を行った。園長・主任から保育目標・方針をご指導頂いた。4年生のこの時期は全ての実習を終えていたため, 社会人としてのマナー等は修得されているとみなし, 授業担当者は同行しなかった。学生が園と行う打ち合わせ事項を指導し, 学生からの報告を受けて対応した。

2 出前保育の内容作りと練習

各チームがテーマ(劇・ダンス・クイズ等パフォーマンス)をディスカッションしながら立案した。毎回, 本時の作業内容と到達目標を共有し, 余裕のある係のメンバーが随時, 手の足りない所に入った。スケジュール管理係も4年生は比較的空き時間があるので, 設定はスムーズであった。携帯で劇練習を動画で撮り, それをメンバーで共有して見合い, 記録も衣装考案もプレゼント製作のアイデアも全て携帯利用で行われていた。授業担当者のスタンプは基本, 学生の自主性に任せ, 学生間での学び合いを重視した。時間的遅れ, 企画内容の薄さ, 子ども理解の浅さ, 子どもの安全等をポイントで指導した。

3 当日の実施

当日はどのチームも計画通りにはいかなかったと学生は記述している。授業担当者が見ている舞台の上で相談し合うなど気になる点も多かった。しかし子どもたちが喜んでくれたり, 先生方がアドバイスを下さったことが意義深かったという学生が多く見られた。

3.2 チームごとの実践

Aチーム

園のガイドライン

園は幼児の1人ひとりを大切に、将来自立した人間となるうえで必要なことを、園生活をとおして学んでいけるように、と願っている園である。

I-1 園への事前訪問

1回目訪問

舞台の場所の大きさ、上手と下手の出入り、着替えの場所、子どもたちの椅子着席状況等主にパフォーマンスを規定する物理的側面を確認してきた。その際に学生が子どもに人気の戦隊物の劇をしたいと園長先生に伝えたところ、「うちの園はTV等マスメディアで伝えられているものは園の保育活動に取り入れられない考えである。幼児教育を本気でやっている。戦隊物の営業を肩代わりするつもりはない。劇は作り直してほしい」と言われた。学生は途中まで準備が進んだ戦隊物の劇を作り直した。

2回目訪問

作り直した「虫菌予防デー」の劇をやりたいと園に伝えた。その案は園のご許可を頂いた。学生が、最後に子どもたちと今流行の妖怪の曲でダンスを一緒に踊りたいと伝えたところ、園から「前回も伝えた通り、当園の保育方針と異なる」と言われ、覚えたダンスの曲は止めた。また園には特別な配慮を要する子が複数いるが、新規な人や場面では必ず泣き出してしまうから気にしないでいいと言われてきた。

授業担当者の指導

園には独自の建学の精神・保育目標が固有無二に存在し、その精神・目標は日々の保育活動の隅々にまで行き渡るものである。園のホームページの保育目標をよく理解し、その目標を達成する為にはどのような方法でどのような活動をすればいいのか考え直すこと。自分たちがやりたいものではなく、園の保育目標を実現する為の方法と活動に視点を移すことを指導した。

I-2 出前保育の内容作りと練習

学生は最初、戦隊物にこだわっており練習も進んでいた。しかし事前訪問時の打ち合わせの結果、作り直すことになった。ちょうど虫菌予防デーの時期であった為、学生は虫菌菌と菌ブラシマンの戦いの劇をすると代案を出してきた。劇も曲目も変更を余

儀なくされたこのチームは、しかしながら何度も話し合いを積み重ねて互いに意見を出し合う機会が多かった分、チームワークが良くなっていった。

授業担当者の指導

授業担当者が練習を見ていると虫菌菌が長い槍で良い菌を何度も突き、やっつけようとする場面があった。長い槍を舞台で振り回す行為が園の保育方針に添うか考え直すように指導した。戦隊物にある型通りの勧善懲悪とテーマこそ違えど表現方法が同じではないか。長い槍を振り回す行為は子どもたちの柔らかな感性にかんして無頓着だと指摘した。もう一度子どもの発達段階を見直すよう指導した。保育の目標やねらいから引き下ろして、そこから保育の意図を創出し、表現方法と発達段階の適合性を考えて、具体的な実践を創りだしていくように具体的に伝えた。演劇部でもなく、ダンス部でもない、保育者をめざす集団ならではの独自性を考えてほしいと伝えた。

I-3 当日の実施

子どもたちと対話する形で勧められたパフォーマンスは、すぐに子どもたちとの良好な関係性を築き、応答的に展開された。メンバーが舞台から降りて子どもたちの傍らに位置づくことで子どもたちとの一体感が生まれていた。それは一方が披露する側で一方が見る側という境目が消失しているような一体感であった。ゆったりと温かい雰囲気醸成しながら展開された。そのせいか最初、必ず泣き出してしまうと言われていた特別な支援を要する子どもが泣かずに楽しんでた。しかしやはり劇の後半、虫菌菌がアクションを大きくした場面で泣き出してしまった。



II 学生振り返りシート

- ・今までこんなに仲間で1つになって練習したり集まったりということがなかったのでとても勉強になった。仲間との距離が縮まった。このメンバーでできて良かった。
- ・みんなで集まった時は通し練習をして個人では自宅や授業の空き時間に練習をした。個人の練習成果が出て、通し練習がうまくいった時は嬉しかった。
- ・園によって方針が違うので、もっと早い時期に事前訪問に行ければ良かった。
- ・劇は全体の流れと一人一人の表現との両方が噛み合うことが大事だった。
- ・とても充実した授業だった。このような体験を他でできなかった。

Bチーム

園のガイドライン

園児数120名。教育目標は、1. 心も身体もたくましい子、2. 自らの力で判断し行動できる子、3. 健康な身体と感性の豊かな子である。

I - 1 園への事前訪問

1回目訪問

主にパフォーマンスを規定する物理的側面を確認してきた。未満児クラス、以上児クラス、子育て広場、計3箇所でのパフォーマンスであった。その環境を事前確認した。その際に学生がアンパンマンをテーマにした劇をしたいと伝えたところ、園に許可された。園の保育方針は理解してから出掛けた。

2回目訪問

お借りする音響の確認をしてきた。

I - 2 出前保育の内容作りと練習

言いたいことを言い合えるメンバー同士で活発な意見が飛び交っていた。しかし意見や希望を主張したメンバーがバイトや授業等で練習に居合わせなかったり、話し合いに収集がつかなくなっていたことも多かった。しかし学生リーダーに力量があり、また欠席するメンバーも連絡を密にしていた為、問題が表出することはなかった。未満児クラス、以上児クラス、子育て広場と3箇所は対象が異なる為、発達段階に見合った計画が練られた。出前保育の内容はアンパンマンがバイキンマンをやっつけて活躍

する定番のものだった。

授業担当者の指導

学生の作成したアンパンマンの衣装やお面がすこぶる見事だった。すでに親しみのあるアンパンマンではあるが、バーチャルな存在でなく、リアルな等身大になった時、子どもたちが感じる違和感・恐怖感を考慮してほしいと伝えた。

I - 3 当日の実施

未満児クラスでパフォーマンスを始めた時、学生は起立して前に並び、子どもたちは首を真上に上げて見る姿勢となった。子どもの視野に入っていないこともあり、子どもからの反応はあまり感じられなかった。その分先生方が子どもたちに「そうそう、あれは食パンマンだよね～」と学生パフォーマンスを補う補足的言葉かけをして下さった。子どもたちは学生ではなく先生方の方をよく見ていた。

以上児クラスで学生が用意したアンパンマンの手遊びをやらうとした時に、子どもたちから「ぼくたちもアンパンマンの手遊びいつもやっているよ。これだよ」とある子どもが立ち上がって言い出してやりかけた。その際、学生はその子どもの声には応えず、「ではやります」と押し切った場面があった。子どもたちは啞然とした様子だった。この場面を後日授業担当者は指導した。なぜ子どもの声に耳を傾けなかったのか。子どもと保育を一緒に作り出すとはどういうことなのか指導した。

子育て広場では先ほどの未満児クラスでの経験を活かして、全員が座り、子どもの視野に収まる姿勢を取ることができた。未満児クラスで先生方の存在に教えられた経験を活かして、子育て広場では学生はしっかりと子どもを視野に入れた展開となった為、子どもの笑顔を引き出し、落ち着いてパフォーマンスが出来た様子であった。

II 学生振り返りシート

- ・練習でみんなが揃うことが難しく、もっと練習したかった。
- ・最初怖がる子もいたが、次第に笑顔になっていく子どもたちを見て、本当にやって良かったと感じた。
- ・行く前は不安でやりたくなかったが、やってみると楽しくてあっという間だった。もっとやりたい。



- ・子どもたちの反応を楽しみながらやることができた。

Cチーム

園のガイドライン

園児数90名。緑豊かで風通しのよい恵まれた立地条件の下、子どもたちがのびのびと育つ環境を提供している。子どもの人格を尊重し、共に生きる喜びを分かち合うという保育理念がある。

I-1 園への事前訪問

1回目訪問

主にパフォーマンスを規定する物理的側面を確認してきた。園庭での実施。実施園の保育目標や方法をすでに理解してから出掛けた。

2回目訪問

ディズニーキャラクター（スティッチ）の寸劇とダンスというテーマを伝え、ご了承頂いた。園児にお面をかぶってもらう為、外帽子の上にお面を装着することについて相談した。

I-2 出前保育の内容作りと練習

キャラクターが話し出すという設定で寸劇を考え、子どもの興味を引き出すにはどのような発問がよいか話し合われた。その話し合いの中で、各自がアイデアを出す、適材適所の人員配置にする等の検討が何度も行われていた。ダンスを一緒に踊る為の振り付けは発達段階を考慮して低年齢でも楽しめるものにした。リハーサルをし、他チームからの忌憚のない意見を受け止めて改善を繰り返した。お面作りの作業中に意見が割れることもあったが、子どもたちに楽しんでもらいたいという一心で学生は目

的に向かうことが出来たようだ。ダンスの振り付けについて5歳児に簡単過ぎるのではないかというリハーサル時に他チームの学生から指摘された。2歳から5歳と運動能力に大きな違いがある場合にどの年齢に照準を定めたらいいのかという質問が出た。

授業担当者の指導

授業担当者は先の学生の質問を受けて、5歳児には簡単であっても、新規な人（学生）が新規な曲で踊ってくれる場合には難しくするよりも自分にも出来ると安心して取り組めることを狙ってほしいから2歳児に照準を定めていいと指導した。

I-3 当日の実施

当日は打ち合せした園庭の場所より、紫外線による熱中症予防が重視されて、子どもたちは木陰に座ることとなった。しかし学生は打ち合せ通りの場所に立ち、子どもたちとの物理的距離が大変遠いものとなった。またキャラクターのお面を配る際にすべて1つに束ねて持参した為、学生7人がお面1箇所にて一時集中して紐をほどいている時間が長かった。キャラクターのお面が耳だけを象徴的に表現したものであったので、低年齢の子どもたちのイメージが引き出しにくかった。

II 学生振り返りシート

- ・子どもたちが楽しく踊れる為にはどうしたらいいか考えるのに苦労した。繰り返しの振りを多く入れてみた。
- ・出前保育2回目だったので落ち着いてできた。
- ・お面を配る時にモタモタして子どもたちを待たせてしまった。そのことに気がついたのに何も出来なかった自分は勇気がないし、力不足だと感じた。もっと臨機応変に対応できるようになりたい。
- ・仲間と協力して練習した時間がとても楽しかった。子どもたちの前でやれて達成感があったし、すごくいい思い出になった。

4. 考察

4.1 出前保育の効果

4.1.1 学内と学外の相互循環

園に向いて事前訪問をすることで、改善点を見出し、学内活動を修正し、再度園でのパフォーマンス

スを行うという経験をした。パフォーマンスの結果から、子どもの反応はどうであったか、先生方の反応はどうであったかのフィードバックを得て、次の学内活動を修正していった。この学内活動と園という学外活動の2つの拠点が8の字を描くように繰り返されることで、学生は現場での保育の展開を実感として学ぶことができたのではないだろうか。出前保育の意義はこの学内活動と学外活動の相互循環で保育の実践を学ぶことが出来る点がまず1点目として挙げられる。

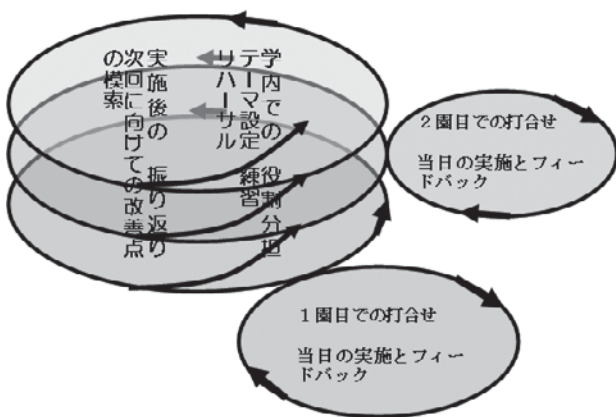


図1 学内活動と学外活動の相互循環

4.1.2 チーム活動の意義

2点目としてはチーム活動の意義である。一人一人が役割を担い、集団に参加して目標に向かっていく。そのことは保育現場で保育を実践する時とまさしく同じことになる。すなわち保育目標達成に向けて、現場では園長、主任、担任、副担任、事務職員と、それぞれの立場や役割を果たしながら協働する活動と同じものとなる。保育実践演習の科目のねらいの2には到達目標として「教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができる」「組織の一員としての自覚を持ち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる」が示されている。「教員として」は個人としての職務を果たしていくことが目指されており、「組織の一員として」は文字通り、チーム、集団としての職務を果たしていくことが目指されており、到達目標を達成できたのではないかと考えられる。チーム保育の擬似体験が出来る意義は大きい。

4.1.3 臨場感の中で学ぶ

3点目としては、子どもたちや園の先生方、そして学友の3者から直接学ぶことの効果である。当然、臨場感・緊張感は圧倒的に高くなる。出前保育をすることで机上の空論を免れて、実感を伴った学習が可能になる点である。子どもたちの前に立つことで、子どもたちからどんな声が挙がって、どんな表情が見られて、どんなことを感じているのか等を受け止めることが出来る。受け止め、投げ返しの応答の対話関係が成立するのである。ともすると学生は指導計画案通りの展開を期待するものだが、保育の実際はむしろ計画案通りにはいかないところに醍醐味があると言っても過言ではない。その面白さを体験できる意義は大きいと考える。

4.2 出前保育の特徴

1 ゴールが明確である。

チームでテーマを持ってパフォーマンスを実践する、という目標があることが学生の自律的な動きにつながっていった。ゴールが明確であるということは同時にプロセスが描きやすいということでもある。例えば劇を上演するというゴールに到達する為には脚本を書き、役を決め、衣装を考え、大道具・小道具を作り等である。学生が個人の役割として、また集団として、何をしなければならないかが導かれやすかったのではないかと。

2 フィードバックが意欲につながる。

子どもたちが喜んでくれたことが次の実践への意欲につながっていったと考えられる。また未満児クラスの子どもたちは呆然としていたが、その分先生方がとても興味を持って見てくれたケースがあったように、フィードバックが先生方からも頂けたことが意欲につながったと考えられる。

3 チームで保育することが体験できる。

正規実習では得られなかった、チームで保育を立案し、実践し、評価し、改善するというチームでのPDCAサイクルを体験的に理解できる。

4 集団による協働性が培われる。

目的集団を形成し、ゴールに向かってパフォーマンスを成し遂げようとする際には、集団構成メンバーの経験の多寡がおのずと存在する。構成メンバーの部活動等の経験数や内容が、担当者としての

役割意識に影響すると考える。しかし、集団経験の多寡はあれど、メンバーの言動を見て、目的に向かっていく過程で互いに影響を与えあう。必ずしも正の影響とは限らず負の影響もあるが、目的に向かう方向性と、目的内容の深さを希求していくよう指導すれば、メンバーは互いに学び合う協働性を発揮し合うことができる。

4.3 保育者養成のなかでの位置づけ

チーム保育の実際を体験的に理解できるということは保育者になれば初日から求められることである。指導案を立案して適切に準備する(バックヤード)前に、その園の保育・教育方針(バックグラウンド)を理解して、その園で育つ子どもを理解することが重要である。現場での適切な臨機応変な対応の土台にはこれらが重層的にあることを体験的に理解することができる。臨機応変に対応する力とその可変性を支えるに足る準備、その土台となる保育目標という基盤がなければいいパフォーマンスは成立しないのではないかと。

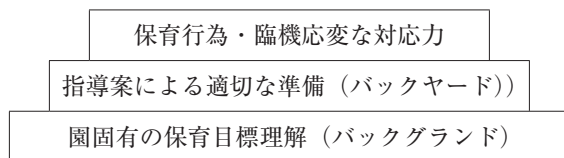


図2 出前保育パフォーマンスに必要な構図

4.4 今後の指導の課題

1点目は事前訪問後の指導である。園の保育を理解し、そのことを自分たちのパフォーマンスにどう反映させるのかについて、教員の学生指導が更に細やかに必要であった。出前保育は日常的な継続性を持ち得ない。与えられたその1回をどのように日頃の子どもたちの生活文脈から切り出して作り込んでいくのかは教員の現場洞察力も問われるものである。

2点目は学生の立案する保育内容についての指導である。学生のパフォーマンスが、マスメディアで取り上げられているもの(アンパンマン等)を活用したもので独創性を欠いていた。人気のあるものを利用すると子どもの興味関心を引き出しやすいという発想は安易で貧弱であること、もっと学生ならで

は、自分たちのチームならではのオリジナリティある立案を指導できなかった。

3点目は子どもを感性豊かに育てることについてである。今回学生が作成したパフォーマンスの内容は勧善懲悪が多かった。善悪を対比的に描くことは子どもたちに大変分かりやすく伝えられるメリットがある。しかしその展開にはイマジネーションを掻き立てる膨らみが必要である。なぜならば子どもたちに育てたいのは安直な善悪ではなく、自分で考えて自分で選んでいく、善悪だけでない豊かな価値観であるからだ。子どもたちの感性を豊かに育てる視点が必要であった。学生たち自身がおそらくや対比的な価値観の中で「善さ」を志向する傾向が透けて見える。学生たち自身の価値観を耕すまで至らなかったことが課題である。

5. 結語

保育実践演習において出前保育を行い、学生の保育実践力を養成する試みを行った。出前保育で学内学修と学外学修を相互循環的に繰り返し、学修を重ねることで実践力が養成できるのではないかと考えられた。チームで協働し合う集団の一員としてのチーム保育の擬似体験を得ることができたのではないかと考えられた。子ども、保育者、学友の3者から現場の臨場感で学ぶことは、指導案通りにはいかなない保育のダイナミックな醍醐味を実感できるのではないかと考えられた。

今後の指導の課題としては、授業担当者の指導の在り方が、段階ごと、内容ごとに丁寧に省察されて、整理されることである。

文献

- 1) 厚生労働省. 平成22年度保育士養成課程等の改正について(中間まとめ). 平成22年3月24日
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0324-6a.pdf>
- 2) 高橋望. 教員養成制度改革に関する一考察—教職実践演習(仮称)の導入過程に焦点をあてて—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報第57集第1号. 2008
- 3) 厚生労働省. 平成22年度保育士養成課程等の改正について(中間まとめ). 平成22年3月24日

栗原ひとみ：「保育実践演習」における学生の実践力養成について

- <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0324-6a.pdf>
- 4) 木谷安憲, 増南太志, 葛西かほる. 平成24年度保育・教職実践演習の実践報告. 川口短期大学紀要 (27) : 233-242. 2013 他
- 5) 文部科学省. 平成18年中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm
- 6) 小原敏郎. 保育・教職実践演習—保育者に求められる保育実践力—. 建帛社. 2013
- 7) 倉橋惣三. 幼稚園真諦. フレーベル館. 2008
- 8) 日本保育協会. 保育所による在宅保育への支援に関する調査研究報告書. 1998
http://www.nippo.or.jp/cyosa/10/10_05_05.html
保育士などを園外に派遣する形態である。在宅保育を支援する方法として自治体単位で行なわれている。

Practical skill training During Childcare Practicum — Through work at a childcare service —

Hitomi KURIHARA^[1] Faculty of Development and Education, Uekusa Gakuen University

The author of this article conducted her childcare practicum through a childcare dispatch service. Dispatch childcare involves limited-time contract work at kindergartens and nursery schools, with responsibilities including the creation of lesson plans, goals for childcare, thus contributing to the aims and activities of each specific facility. From participating in this kind of childcare service, three effects were observed:

- 1- It was possible to learn both inside and outside of school.
- 2- It was possible to learn the meaning of team activities.
- 3- It was possible to learn from children, teachers and classmates.

Teaching classes involved the following four points:

- 1- Clear goals.
- 2- Feedback leads to motivation.
- 3- Experience caring for children in teams.
- 4- Group co-operation is cultivated.

Possible future topics include the following three points:

- 1- Reflections on performance of the facility's childcare goals.
- 2- Creativity in performance.
- 3- Direction of assistance.

At the preschool training phase, the author thinks that effective use of groups of students caring for children would support the students learning of practical skills.

Keywords: childcare practice exercise, the delivery class of childcare activity, practical skill

[1] Hitomi KURIHARA

